



私たちは 責任を果たせるか

齋藤 栄二 Saito Eiji

「知識が力そのものになる。南北問題の解決が最大の課題と考えるが、腕ずくの軍事や経済だけでは、答えを導き出せない。『知』がなければ、国際社会が成り立たない時代が到来しつつある。特に資源のない日本は『知』をもって国際競争力を得て、世界に貢献する以外に道はない。」

これは2001年にノーベル化学賞を受賞した野依良治氏の発言である（2005年1月1日読売新聞）。私たちの年代は次のようなことを聞かされて育った。

「日本には石油などの自然資源がない。あるのは人間である。つまり人材だ。この人材を育てることによって、技術を発展させ世界に貢献していくのが日本に課せられた道である。」

戦後はこのフィロソフィーは確かに生きていた。町工場の中から生まれた本田やソニーは、世界の企業へと発展していった。ところがその人材育成が怪しくなってきた。人材育成を支える学力がついていない。2004年の暮れ12月8日、各新聞は一斉に学力の国際比較について報道した。経済協力開発機構の国際学習到達度調査の結果の発表である。数学、科学、読解力の各分野にわたって日本の低落状況が目立った。

「人材だけが資源だ」と言ってきたその日本の資源が危うくなりつつある。自然の資源がない日本。だから人材育成が生命線であった日本。その人材育成が長期低落傾向の兆候を示しているとき、日本の将来はどうなるのであろうか。

今教育を考えるとすれば、一番大きな問題は将来

に向けて次の世代を力ある国際人として育てておくということではなければならない。そういう広い視野から英語教育のあり方を考えることが、全ての英語教員に求められている。「国際理解」ということは、英語教育の分野ではよく議論される。ならば、私たち英語教員こそが広い視野と物事に対する本質的な理解を持つことが必要ではないか。

こういう状況のなかで、今私たちが直面している課題はなんであろうか。次の3つである。

- 1 英語の基礎学力を育成する。
- 2 英語を使う技能を育成する。
- 3 広い視野を育成する。

私は英語教育の流れをおよそ40年以上にわたって見てきた。川が流れるのと同じように、英語教育も一刻も休むことなく今日に至るまで流れ続けてきた。時にはゆったりと、時には急激に。今は激流である。そして時代は英語教育に対する期待をますます強めている。今や教育の世界全体にわたるキーワードは「自由化」の方向である。そういう状況のなかで、私たちの力の発揮が問われている。それは次の世代の育成につながっていく未来への責任を伴った仕事である。英語教育の場を通して力を合わせようとみなさんに呼びかけたい。

さいとう えいじ

関西大学大学院外国語教育学研究科長。専門は英語教育学。現在の最大の関心事は基礎学力。著書に『より良い英語授業を目指して』（大修館書店）、『基礎学力をつける英語の授業』（三省堂）ほか多数。